中四国ブロック主催1級認定講習会
審判員の技量格段に進歩

11月7日、8日の2日間、岡山県勝田郡奈義町、奈義町総合運動公園野球場で、ボーイズリーグ中四国ブロック主催、1級認定講習会が開かれました。

「ある、ある、こんなケース」。「こんなケース、実際にあるの？」といった筆記試験もあり、審判員の方々は、日頃の勉強も怠れません。実技では、いろいろな場面を想定しての指導です。とても厳しい口調で、指導員からの檄が飛びます。「ちがうだろ！　ジャッジがはやい！」、「ちがう！　ジャッジがおそい！」、「その角度で見えるのか？　そこでは見えないだろ！」「いや、そこでは近すぎる！」。指導員の言葉に、審判員の中には、はじめは釈然としない表情をしてる方々もいましたが、指導員が丁寧に、細かく説明を加えると皆さん、納得した顔で「やはり、そうだな」とか「確かに」とうなずき、ほんとに真剣でした。

▶▶　真剣に話を聞く各審判員

以下、指導員のお話です。「昨年と比べると、各審判員の一人一人の技量が格段に進歩したように感じました。一つ一つのプレーをとても大事にしており、プレーや、それを超えた選手たちへの思いの濃さのようなものを強く感じました。面接時にも、審判としての責任感だけでなく、選手へのやさしさ、思いやりをすごく感じました」。

今日は、1級の審判講習会ですが、「1級は、目的でなく手段！　うまければ良いというものではない」。そのことを十分理解し、今後のジャッジにつなげていってもらいたい。また、今日参加している審判員は、全員が、技量向上のためにどうやればいいか、どうすればいいかはよく理解していると思います。一人では、できない練習も多々あるので、チーム、支部、ブロックが一体となって日々の育成の模範となれるように努めていただきたいと思います。

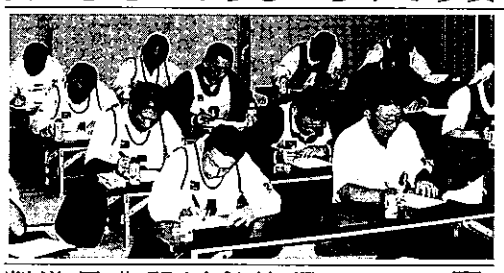
もっと技術高めて頑張りたい

1級審判認定試験を今回初めて受講致しまして、改めて審判のジャッジの難しさを感じました。初日のゴー・ストップ・コールから始まり、さまざまな場面での判断力、また動き、待ち受けの位置思うように動けず、自分自身、今までやってきたことがなんだったのか情けない気持ちでの始まりでした。

一番大事な声も大きく出せず。ですが周りの先輩審判員さんの一生懸命な姿を見て、自分も早くこの方々のような審判員になれるように頑張ろうという思いになり、全ての試験に全力で取り組みました。指導員さんからの、厳しい指導も受け、思うように行かない所も多々ありましたが、いろいろなことを勉強させてもらいました。

この認定試験に行ったことを教訓に、これからもっと審判技術を上げてボーイズリーグの審判員として頑張って行きたいと思います。

【広島県支部・日高　賢治】



中日本審判認定講習会
1級目指して繰り返し実技

中日本ブロックの審判認定講習会が豊橋中央高校グラウンド（2015ドラフトに指名された谷川原選手の在籍高校）で開催されました＝写真＝。連盟より宇佐美認定員と中園認定員による指導のもと、皆さん1級審判員を目指して真剣に受講されておりました。講習会では基本的な「GO STOP CALL」「タッチプレー」「フォースプレー」での位置や動きの説明を受けた後に、実技を順番に繰り返し行っていました。

判定次第で子供達の将来左右

栃木県支部で審判員を務めています水野浩一です。今回審判長の代理で投稿することになりました。子供が所属チームを卒団して、お世話になった恩返しの気持ちでそのまま審判員を続けています。ただ審判員になって、思っていた以上に責任が重いなと感じました。「我々の判定次第で、子供達の将来を左右することもある」と、言われたことがあります。今後もそのことを感じながら、一生懸命プレーする子供達に少しでも応えることができればと思っています。

忍耐力が指導者に最も必要

ドミニカ共和国はウィンターリーグが開催中

日本では、そろそろ大きな商店街や、デパートなどで、クリスマスの飾りつけが出始め、BGMにもクリスマスソングが聞こえだすころと思います。ボーイズの編集さんから「ドミニカは常夏の国。そんな常夏のクリスマス、皆さんどのように過ごしているのですかね。私は以前、サンタクロースはサーフィンでやってくるっていうことを聞きましたが、これって本当ですか？」という質問をいただきました。

ドミニカのクリスマスは花火などを打ち上げて、結構賑やかにイベントを楽しみますが、そりを引くトナカイはもちろんいないですし、サンタクロースも出てこないです。でも、11月頃になると、こちらでは年末モードで人々はあまり仕事をしなくなります。貧しい、貧しい、あいつらはハングリー精神がある！と日本では言われますが、実際は結構のんびりしています。日本人からしたら「もっと働けよ～！」と思うくらい。あったかいので贅沢しなければ食べるものも着るものも困らないですからね。

8月からボーイズリーグニュースにて、この連載を担当している阪長友仁（さかながともひと）と申します。せんえつながらこの場を借りて、自身のこれまでの道のりをお伝えしたいと思います。

私は大阪府の交野市に生まれ、小学1年から中学3年までの9年間、ボーイズリーグでプレーし、その後、新潟明訓高校、立教大学へと進学し大学卒業まで野球を続けてきました。

大学卒業後、いったん大手の旅行会社に就職しましたが、しばらくたつと、自身を育ててくれ、かけがえのない仲間と出会わせてくれた野球に何か恩返しがしたいという気持ちが徐々に強くなってきました。でも、よくよく考えてみると、日本には野球指導者はたくさんいる、野球道具を売っている店もたくさんある、野球場もたくさんある、もしかしたらこの日本で野球を指導するより、野球が盛んではない国、道具が足りていない国、野球場が整備されていない国で野球指導をした方が、世界の野球界全体を考えた時に自身が最も貢献できることなのではないか？と思うようになりました。

2年間務めた会社に辞表を提出し、色々な方の紹介を頼りに向かった先はインド洋に浮かぶスリランカという島国。当時は26年間続いた内戦の真っただ中でした。国中探しても、野球場は一つもなく、野球道具を売っている店もない。それどころか道端の自動車に仕掛けられた時限爆弾がさく裂し、駅や検問所など人の多く集まるところでは自爆テロが頻発。多くの方が犠牲になり続ける状態で、平和とは程遠い状況でした。そんな状況にもかかわらず、野球と出会い、野球を好きになった選手たちは自ら野球ができるグラウンドを探し、何時間でもバスや列車に揺られて練習に向かいます。お古のグラブを嬉しそうに手にはめた選手たちと出会ったとき、最初に彼らが発した言葉は「こんにちは！」でも「はじめまして！」でもなく「僕に野球を教えてほしい！」でした。

海外での学びを生かしたいという阪長氏（左から3人目）

自分の国が内戦状態、野球の大会すらない。そんな状況でも野球を楽しみ、そして日々うまくなりたいと練習に励むスリランカの選手たちと過ごす日々はあっという間に過ぎ去っていきました。気が付けば、インド洋に沈む夕日を眺めながら、私はある疑問を抱くようになっていました。「自分は野球を教えるために来たはずなのに、野球を心から楽しむこと、今日も生きて野球ができることに感謝することを彼らから学んでいる…」。

教えにきたはずなのに、彼らに教えることよりも彼らから学んでいることの方がはるかに多いことに気づかされました。その後、約2年間にわたり、同じアジアのタイ、アフリカのガーナで野球指導に携わる機会をいただき、さらに学びを深めることとなりました。2008年からはラテンアメリカへ渡り、南米のコロンビアへ青年海外協力隊として派遣され現地の野球指導に2年間携わり、2011年から3年間は中米のグアテマラで野球やスポーツのみならず同国の発展のために駐在し、勤務する機会を得ました。

ラテンアメリカと言えば、ブラジルを除き、ほとんどの国でスペイン語が話されていますが、その中にはドミニカ共和国、キューバ、プエルトリコ、ベネズエラといった野球強豪国もたくさん存在します。これらの国々へは比較的渡航しやすく、時には勤務として、時には個人的にドミニカ共和国を訪問する機会が増え、気がつけば現地の多くの野球関係者とのつながりができていました。

ロサンゼルス・ドジャースのドミニカ共和国アカデミー（16～18歳の選手たちを育成する機関）で27年間勤務されている方。人口たった5000人から現役だけでメジャーリーガーを5名輩出している村のチーム（12～17歳対象）の指導者の方々。そして多くの現役メジャーリーガーたち。彼らは何一つ隠すことなく現地の練習方法、育成システムを私に教えてくれるようになりました。

人口たった1000万人から、158名（2015年現在）のメジャーリーガーを輩出しているドミニカ共和国。日本の1億2000万人から10名（同じく2015年現在）とはとてつもない差となっています。彼らの活躍を日本では「身体能力の違い」や「ハングリー精神の違い」と表現される傾向にありますが、それは彼らにはできるけど我々は最初から無理なのだという考え方です。しかし、実際に現地に赴いてみると決してそうとは思えないのです。彼らは日本人にも可能な練習方法、育成方法で優秀な選手をたくさん輩出しており、決して最初から無理だとあきらめるのではなく、日本の子供たち、選手たちの本来持っている能力を今よりも引き出すヒントがいたるところに隠されているのです。

ドミニカ共和国は常夏ですが、この12月は乾期にあたり、実は野球シーズン真っ盛りです。ウィンターリーグと呼ばれるドミニカのプロリーグが開催中で、参加する6チームにはマイナーリーグからメジャーを目指す将来有望な若手選手はもちろん、たくさんの現役メジャーリーガーまでがプレーしていて、それぞれが更に高いレベルを目指して試合に臨んでいます。いつもメジャーでプレーしている選手を目の前で見られると、球場には自国のファンが多く駆け付け1年で一番華やかなシーズンを迎えています。

また、さらに若い選手たちは将来の来るべき日に向けて、黙々と練習に励み、それを指導者たちがサポートしています。サポートと書きましたが、文字通り〝サポート〟で指導者が選手に答えを〝教える〟ということはありません。指導者たちは意識的にも直感的にもわかっています。「こう捕れ、こう打て、と教えた方が今はできるようになる。でも、人に言われてできたことは自分のものにはならず、いつか選手が行き詰ってしまう」のだということを。「プレッシャーを与えて（叱って）プレーさせては思い切ったプレーができなくなって、彼らの能力を最大限発揮できなくなる」ということを。

なので、来る日も来る日も選手たち自身が気づけるようにサポートして待ち続けるのです。たとえ、うまくできなくても、「いつかできるようになる。それまで共に練習しよう」と、前向きな言葉をかけ続けます。決してプレーの結果に対して選手を責めることはありません。彼らの成長の先にある結果が見えるのは、たとえ10年後でも、20年後であったとしても待ち続けます。この忍耐力こそが、指導者として最も必要なことだとわかっているからです。

私自身、ある時からこれまでの海外での学びを活かして、日本の野球界に貢献することが今の使命なのではないかと思いはじめました。2014年からはNPO法人BBフューチャーに籍を置き、大阪でボーイズリーグチームの指導に携わったり、中学・高校・大学の指導者対象の研修会を開催したりしています。この11月末から2か月間、改めてドミニカ共和国をはじめとするラテンアメリカ諸国に来ていますが、この学びを引き続き多くの方々と共有し、日本の未来を担う子どもたちのために役立てたいと考えています。

時代はめまぐるしく変わり、世界も変化し続けています。その中で日本の置かれている環境、日本の中で野球の置かれている環境も刻々と変化しています。野球を通じて未来ある子どもたちに何を伝えていくか、子どもたちが立派に成長していける環境を作っていくか。これは試合の勝敗よりも、とてつもなく大きなテーマであると思います。

そして今こそ真に子どもたちの未来のために何ができるかを考える時なのではないでしょうか。国内外問わず様々なことから学び、これまでの固定概念にとらわれることなく、自ら変化する勇気を皆さんと共に持ち続けていたいと思います。